

『こゝろ』の奥さんと御嬢さん

松 本 洋 二

一 はじめに

夏目漱石の『こゝろ』は、「上 先生と私」「中 両親と私」「下 先生と遺書」の三章から成る。ここでは、「下 先生と遺書」の奥さんと御嬢さんを取りあげ、「私」（先生）との関わりから彼女たちのイメージをとらえていく。荒正人氏は『心』と『道草』の中で次のように述べている。

△ここできさやかな疑義を提出すれば、先生の恋愛がほんとうのそれであつたか、どうか、ということである。もしそうであつたならば友を真切つたという罪の意識にもなおつらく耐えて、ひとりの女を愛しぬくことができたのではあるまいか。そのような生き方をもとめた場合には、死をえらぶときにもひとりではなく、ふたりの死をもとめたのではあるまいか。漱石の周囲でいえば、森田草平の「煤煙」事件がそれであつた。ここはすくなくとも恋愛だけは存在していた。しかし、「心」の恋愛が、近代人の眼にはなんとなく物足らぬ雰囲気につつまれていることも否定はできない。お嬢さんも、妻も、作中人物としての造型性に欠けていることは、「心」の欠点として挙げていいであらう。だがそれは、この作品の構成を破壊し去るほどのものではない。罪の意識に苦しむ先生を追跡するには十分な仕組であると思つてもいいであらう。▽

この文章の中で、「先生の恋愛がほんとうのそれであつたか」という疑義、またこの作品にみられる恋愛が、「近代人の眼にはなんとなく物足らぬ雰囲気につつまれている」という点については賛成である。しかし、「お嬢さんも、妻も、作中人物としての造型性に欠けている」という見方はうなずけない。御嬢さん、それから奥さんもだが、この二人は、「私」の眼を通して、かなりそのイメージがとらえられるように描かれていると思うのである。

二 奥さんの思わく

奥さんは、日清戦争で夫に戦死された。経済的にはさほど困っていない。娘が一人いて、その娘が作中でのいわゆる御嬢さんである。

この奥さんは、てきぱきと物事を処理する人のようであつて、「私」の下宿の件も、即座に承諾している。また、Kが死んだとき、「私」が、「みんな奥さんに命令されて行つたのです」（下五十）というように、「私」を動かして警察や医者に行かせる処置をしている。

「私」は奥さんのきはきしたところを、「軍人の妻君」だからだろうと思つていたようだが、実際は、夫に先立たれて一人で娘を育てていく間に培われた部分も大きかったのではあるまいか。

さて、この奥さんはなかなか深謀遠慮に長けた人でもあつたようだ。その面での特色を、御嬢さんと「私」との結婚問題で考えていこう。

『夏目漱石集Ⅳ（日本近代文学大系27）』の頭注では、遠藤祐氏が、「私」の申し込みに対して奥さんが「私」の予期したほど驚かなかつたことについて次のように言っている。

△「先生」から結婚の申し込みをされるという事態が、いつかは訪れるだろうと、暗に、予測していたのではないか。▽

また、奥さんが、「本人の意向さへたしかめるに及ばないと明言しました」というところについては次のように説明している。

△これは、親の意志に娘が従うのは当然だという態度ではあるまい。むしろ奥さんとお嬢さんとの間には平生から対話があり、意志がよく疎通しているから、こう「明言」できるのだと見るべきであらう。▽

このことについては、そのあとで奥さんが、「本人が不承知の所へ、私があの子を運る筈がありませんから」と言っていることとあわせて考えれば、ほぼ確かなことであろう。この点をふまえて、更に奥さんの思わくについて考えていこう。

奥さんが、「私」と御嬢さんを接近させたがっていたことは間違いない。

「私」がそこに気づいて言及したのは、「下十四」で、「奥さんの様子を能く観察してゐると、何だか自分の娘と私とを接近させたがってゐるらしくも見えるのです」とあるのが最初である。それから「私」は、「叔父と同じやうな意味で、御嬢さんを私に接近させやうと力めるのではないか」（下十五）と思うやうになり、奥さんが、「狡猾な策略家として私の眼に映じて来た」（同）のである。

奥さんが、叔父と同じやうな意味で、つまり「私」の財産を狙っていて、そのために御嬢さんを「私」に近づけようとしたというのは、「私」の妄想であつたらう。奥さんが、自分の娘の将来のために、しっかりと伴侶を求めるといふのは、親として当然考へるはずのことである。そして、その対象が、学問もあり、人柄もよく、財産もかなりある「私」であつたとして、その時点で奥さんを叔父と同じやうに考へるのはいわれの無いことである。

奥さんが、「私」に極めて親身に接し始めたのは、「私」が、叔父にだまされた話をして、二度と郷里へは帰らない、と言つてからである。「それから私を自分の親戚に当る若いものか何かを取扱ふやうに待遇するのです」（下十五）というやうになる。この態度の変化は、「私」が自由な身の上であることを知つた奥さんの気持ちの現れであつたらう。純粹に「私」を気の毒に思う気持ちがあつたことも確かだろうが、それとともに、故郷から切り離された「私」が、奥さんには自分たちの世界にぐんと近づいて感じられたといつてよい。

おそらく、奥さんは、心配の種である一人娘の将来と「私」とを、この頃から自覚して結びつけ始めたと思へられる。こうした奥さんの心理は、「下十七」の、着物を買いに出かけるころにもよく出ている。「私」は着物をこしらへるといふ奥さんの勧めでその気になり、しかも、「御嬢さんの気に入るやうな帯か反物を買つて遣りたかつた」ためもあつて、万事を奥さんに依頼したのである。すると、奥さんは半ば強いるやうにして、「私」と御嬢さんを買物に連れて行き、御嬢さんの着物の見立てについても、「私」に相談するのである。

△奥さんはわざわざ「私の名を呼んで何うだらう」と相談をします。時々反物

を御嬢さんの肩から胸へ堅に宛て、置いて、私に二三歩遠退いて見て呉れろといふのです。√（下 十七）

奥さんのこんな態度は、娘を「私」に近づけようとするものだと思はざるを得ない。

「私」は、そのことがあつた後、大学で友人から、いつ結婚したのかとひやかされる。その話を「私」は下宿に帰つて二人にした。

△奥さんは笑ひました。然し定めて迷惑だらうと云つて私の顔を見ました。私には其時腹のなかで、男は斯んな風にして、女から氣を引いて見られるのかと思ひました。奥さんの眼は充分にさう思はせる丈の意味を有つてゐたのです。√（下 十八）

この時点では、もう、奥さんが娘の結婚相手として「私」を考へていたことは間違いないだらう。

そして、奥さんは、「私」の気持ちを確かめようとしながら、「私」を巧みに自分の考へに誘ひ込もうとする。「私」が、御嬢さんの結婚について、奥さんの意向をそれとなく探つたとき、奥さんは二、三結婚話のあることを告げたらうで、「まだ学校へ出てゐる位で若いから、此方では左程急がないのだ」（下十八）とも言つてゐる。これは、「左程急がないのだ」という形で結婚話を持ち出して「私」を刺激すると同時に、「私」にもしその氣があるのなら、また学生の「私」にも充分機會があることをほのめかしたものである。

奥さんとしては、ここまで誘つたのだから、「私」の反応がほしいところだつたとみえる。その証拠に、「私」が何も言わずにその場を立ちかけると、奥さんは「急に改たまつた調子になつて」、「私」に御嬢さんを早く結婚させた方がよいかどうかを尋ねている。

△私は成るべく緩く緩くの方が可いだらうと答へました。奥さんは自分もさう思ふと云ひました。√（下 十八）

「成るべく緩く緩くの方が可いだらう」と答へた「私」の心理にも考えさせられる点があるが、ここでは奥さんの心理を追つていこう。物事をてきぱきと処理す

る奥さんが、下宿人の「私」に、自分の娘の結婚について、それも「私」が座を立とうとするときに、なぜわざわざ意見を求めたのか。それに、奥さんはそのすぐ前のところで、「此方では左程急がないのだ」と言っているのだから、自分の考えを固めるのに尋ねたというよりも、ここではむしろ、「私」の反応を確かめたかったのだとみてよいだろう。奥さんは「私」が御嬢さんに恋心を抱いていることに気づいていただろうが、好きだということと結婚とは違うのである。「私」がもし、ゆっくりでない方がよいだろうといった意味のことを言っていたとしたら、奥さんは考え直さなければならなかったはずである。ともあれ、「私」の返答で、脈はあると奥さんは考えたことだろう。

「私」がKを下宿に連れて来ることに、奥さんは大そう反対した。奥さんは、いろんな言い方を試みて「私」の考えを変えようと図るが、「私」の方ではそれを筋の通らないこととみなして、苦笑する。

△すると奥さんは又理屈の方向を更へます。そんな人を連れて来るのは、私の為に悪いから止せと云ひ直します。何故私のために悪いかと聞くと、今度は向ふで苦笑するのです。√(下 二十三)

「私の為に悪い」というのは、奥さんが、御嬢さんに対する「私」の気持ちに気づいていて、そんなところに、別の男を入れることはないではないかといった意味で述べたものと考えられる。奥さんとしては、「私」の方から結婚話を出させたかったようである。当時の風潮からしても、男の方から言い出すのが自然だったのかも知れないし、また、「極めやうと思へば何時でも極められるんだから」(下十八)と半ば誇示してみせる奥さんにとっては、「私」を誘導して結婚話を持ち出させるのが自然の道であつたらう。だから、このときも、「何故私のために悪いか」という問いに、苦笑するよりほかなかつたのである。もし、「私」がもう少しいいわゆる処世術に長けていたならば、もっとスムーズに御嬢さんとの話は進んでいたに違いない。しかし、実際には「私」は、奥さんを策略家ではないかと疑っていて動こうとしなかつたのである。

Kが下宿にやって来てから、いろんなことが起る。

奥さんは、「私」と御嬢さんの二人だけを家に残して出かけることは決してしなかつた。それなのに、ある日「私」が帰って来ると、Kと御嬢さんがKの室にいて、奥さんは外出していたのである。「私」が、急用でもあつて出かけたのか

と尋ねると、御嬢さんはただ笑うばかりである。しかし、そのとき「私」は、かなり緊張した顔つきをしていたらしく、御嬢さんは「私」の顔色を見て、すぐ不断の顔つきにもどつた。夕食のとき、奥さんが、いつも来る魚屋が来なかつたので買物に行っていたと説明した。すると、御嬢さんは「私」の顔を見て、また笑い出した。しかし今度は「奥さんに叱られて」笑うのを止めたのである。(下二十六)

この、「奥さんに叱られて」というのは、次の場面と考え合わせると興味深い。そのことがあつてから一週間ほど経って、「私」は、またKと御嬢さんが一緒にいるところに出くわす。

△其時御嬢さんは私の顔を見るや否や笑ひ出しました。私はすぐ何が可笑しいのかと聞けば可かつたのでせう。それをつい黙つて自分の居間迄来て仕舞つたのです。だからKも何時ものやうに、今帰つたかと声を掛ける事が出来なくなりました。御嬢さんはすぐ障子を開けて茶の間へ入つたやうでした。

夕飯の時、御嬢さんは私を変な人と云ひました。私は其時も何故変なのか聞かずにしまひました。たゞ奥さんが睨めるやうな眼を御嬢さんに向けるのに気が付いた丈でした。√(下 二十七)

以上二つの場面で、奥さんが御嬢さんを叱つたり睨んだりしたのは、単に娘の行儀の悪さを咎めたということではあるまい。奥さんは、「私」と御嬢さんとの結婚に希望をもつていながら、「私」の今一步の踏み込みがなくて少々困つていたところであつたと考えられる。奥さんは、いわば待つことで日を過ごしていたのである。そんな、自分たち親子と「私」との間が微妙なところにもつて来て、御嬢さんが笑つたりするのは、奥さんから見ると、なれなれしい軽卒な行為に思えたのであろう。御嬢さんの態度は、自分の婚約者が他の男のことで嫉妬するといつておかしがるのに似ているのである。奥さんはそんな娘を軽はずみだとみなしたのであろう。

奥さんが、「私」と御嬢さんを二人きりにしないで、Kと御嬢さんのときは二人にしてもかまわなかつたというのは、御嬢さんの結婚相手としてKは論外であつたということだと思われる。換言すれば、Kの性格や日常の態度からみて、彼は安心のできる男であつたということではないだろうか。「私」の場合は、「私」と

御嬢さんとがともに内心で憎からず思っていて、しかも将来を約束しあうまでの仲には至っていない段階なのだから、過ちがあつてはならないと考えるのが、当時の親としてむしろ自然である。

そんなことがあつてまもなく、学年末試験が済んで、「私」とKは大学生活最後の夏休みを迎える。「私」はその休みを利用して旅に出ようとKにもちかけない。二人の議論の收拾がつかなくなつたとき、奥さんが仲に入って、結局二人は房州に旅に出ることになった。ということはつまり、奥さんはKの方を説得して旅に出ることを勧めたということになる。奥さんは自己の道をひたすら一人で歩むようなKのことを心配して、旅に出ることを勧めたのかもしれないが、結果的には二人の留守中に、奥さんは、結婚を中心とした将来のことについて、娘と充分話し合う機会をもつことができたことになるのである。

二人が話し合いをしたというようなことは一言も書かれていない。しかし、旅から帰つて、御嬢さんの態度が変わつたことは、Kと「私」のいない間に、親子で何らかの話があつたことを裏付けているのではあるまいか。

△私は御嬢さんの態度の少し前と交つてゐるのに気が付きました。久し振りで旅から帰つた私達が平生の通り落付く迄には、万事に就いて女の手が必要だつたのですが、其世話をしつゝ呉れる奥さんは兎に角、御嬢さんが凡て私の方を先にして、Kを後廻しにするやうに見えたのです。それを露骨に遣られては、私も迷惑したかも知れません。場合によつては却つて不快の念さへ起しかねなかつたらうと思ふのですが、御嬢さんの所作は其点で甚だ要領を得てゐるから、私は嬉しかつたのです。√(下 二十五)

△私がKより後れて帰る時は一週に三度ほどありましたが、何時帰つても御嬢さんの影をKの室に認める事はないやうになりました。√(同)

御嬢さんのこうした態度の変化が、あの、相手の気持ちを考慮しない笑い方をするやうな御嬢さん自身の知恵によつてゐるとは考えられない。なるほど実行するのは御嬢さん自身であるのだから、奥さんの一方的な押しつけではなかつたろうが、少なくとも二人の間に話があつて、それがこうした態度の変化になつて現れたとみるのが妥当である。その話には、「私」に対する御嬢さんの気持ちの確認も含まれてゐたと考えられる。「私」の申し込みのとき、奥さんは、「本人が

不承知の所へ、私があの子を遣る筈がありませんから。」と言つてゐる。この自信も、また今みた御嬢さんの態度の変化も、奥さんが娘をよくとらえてゐるところから出てきたものだといえよう。

御嬢さんのこうした態度は、一か月以上は続いたらしいが、十月の中頃から、御嬢さんはまたKの室に入出入りするようになる。

そして、奥さんはそんな御嬢さんの態度を黙認してゐる。Kと御嬢さんが偶然外で出くわして、一緒に帰つて来たことがあつた。その日の夕食時、御嬢さんは「私の嫌な例の笑ひ方」をしたうえに、「何処へ行つたか中て、見ろ」とまで言つたりするのである。しかし、ここでは奥さんは娘をたしなめてはいない。もちろん奥さんは「私」の気持ちに気づいてゐたはずだ。

△其頃の私はまだ癩癩持でしたから、さう不真面目に若い女から取り扱はれると腹が立ちました。所が其所に氣の付くのは、同じ食卓に着いてゐるものゝうちで奥さん一人だつたのです。√(下 三十四)

このように奥さんは「私」の気持ちを察してゐたはずであるのに、御嬢さんの氣まますを見のがしてゐるようである。これは、御嬢さんがKに近づくことで「私」が刺激されると知つて、「私」の動揺を待つてゐたからではないだらうか。

似たようなことが、年のあけた正月にもある。百人一首のカルタとりのとき、御嬢さんは、「仕舞には二人が殆んど組になつて私に当る」(下三十五)といふほど、Kに加勢をするのである。ここでも奥さんは何にも言つた氣配がない。他に誰かいるのならともかく、四人しかいない場である。以前の奥さんであつたらば、少しは「私」のことを考へて御嬢さんに注意をしたに違いない。こういうところからも、奥さんは思ひくをもつて放つてゐたと考えられるのである。

おそらく、奥さんの気持ちとしては、なかなか動き出そうとしない「私」がじつ々しかったのであろう。「私」が御嬢さんに恋心を抱いてゐることはかなりはつきりしている。娘とも「私」はよく話をするし、着物の件のあるときにも反応は悪くなかつた。それなのに、「私」はKという男を自分の下宿に呼んで来てしまふ。奥さんには、表面上の「私」はともかく、深いところまでわかつてゐなかつたのである。それで、Kと「私」が旅をしている間にじつ々娘と話をして、それまでのぶしつけな態度を改めさせ、「私」を大切にさせてゐた。それでも「私」は動かなくなつたのである。そのうち御嬢さんの方がKと話をするやうにな

る。そうすると、奥さんは「私」の踏み出しを誘うために、今度は娘の態度を黙って見ていたのである。

しかし、そんな奥さんの思わくも、「御嬢さんがKの方に意があるのではなからうか」(下三十四)という「私」の疑念のために、なかなか成功しなかった。ところが、突然奥さんの思いがかなえられることになった。Kが「私」に御嬢さんへの恋心を告白したために、「私」は心理的に追いつめられ、とうとうKを出し抜いて、奥さんに御嬢さんとの結婚を申し込むことになったのである。

△私は突然「奥さん、御嬢さんを私に下さい」と云ひました。奥さんは私の予期してかゝつた程驚ろいた様子も見せませんでした。それでも少時返事が出来なかつたものと見えて、黙つて私の顔を眺めてゐました。V(下 四十五)

奥さんは、自分の思わく通りに事が運ばないのをじれったく思っていた。彼女は、Kと「私」との間に何があつたか知らなかつたのだから、「少時返事が出来なかつた」のは当然だつたらう。それにその朝、「私」は仮病を使ったのだが、奥さんは病気で大学を休んだと思つていたのである。奥さんは「あげてまい、が、あんまり急ぎやありませんか」と言つている。やはり唐突の感は免れなかつたのである。

その奥さんの多少の驚きに比べてもっと重大なのは、「奥さんは私の予期してかゝつた程驚ろいた様子も見せませんでした」というところである。これまでみて来たように、奥さんは、御嬢さんを「私」と結婚させたらよいと考えており、以前からそれ相応の心の準備が出来ていたとみられるのである。「本人が不承知の所へ、私があの子を遣る筈がありませんから」という確信に満ちた奥さんのことばは、前に述べたように娘との話が出来ていたことを示すが、もっと大きくとらえれば奥さんの心構えの現れとも考えられる。

こうして、「私」と御嬢さんの結婚の約束が交わされたのであるが、聡明な奥さんも、Kの御嬢さんに対する恋心には気づいていなかった。Kのような、口数の少ない、一人で精進の道歩むのを信条とするような青年は、行動的で世なれた奥さんには、その内面まで理解することがむずかしかつたのであろう。もし、奥さんがKの気持ちに気づいていたら、御嬢さんがKと親しげにふるまつているのを見て、注意したことであろうが、実際には奥さんは、娘と「私」に気をとられ

ていて、Kの心をのぞくことがなかった。

そして、奥さんは、婚約以後もKのことはわからなかつたのではないか。「私」が婚約のことをKに言えないでいるうちに、奥さんがKに話してしまつたが、「道理で妻が話したら変な顔をしていましたよ」(下四十七)と言つて、「私」がKに黙つていたことを責めている。Kの「変な顔」の意味に気づくどころではないのである。また、彼女はKの死の直後、驚き怖れながらも、「不慮の出来事なら仕方がないぢやありませんか」(下四十九)と言つて「私」を元気づけている。突差に「不慮の出来事」と言つているところからみて、奥さんは、Kの御嬢さんへの恋心には、全く気づいていなかったとみることが出来る。

このようにみてみると、結果的には奥さんにとって望ましいように事態は動いていったといえる。しかし、「私」がKとの関係からKを出し抜いて結婚の申し込みをしたことは奥さんにはわかりようがなかつた。ましてや、「私」がKの死の直後、自分の恐ろしい未来をみてしまったことや、御嬢さんの将来の不幸などは思つてもみないことだつたに違いない。

三 御嬢さんは「私」が好きだつた

平岡敏夫氏は、御嬢さんに触れて次のように語つている。

△やはり、お嬢さんという人が本当に先生にわかつていれば、この人の心をつかんでいれば、こんな悲劇は起こらないわけです。つまり、先生には自分を愛してくれているかどうかという確証がないわけです。だから疑心暗鬼になるわけです。もともとこういう性格は、おじさんが財産を横領する前から持つていた性格だと書いてありますね。おじさんにああいうことがあつてから、なおますます、結局須永市蔵のような性格があつた先生に形成されていきますから、なお信じることができない。そういう点では、お静という人もかなり能動的に書かれていゝんです。V

静というのは御嬢さんの名であるが、ここで、御嬢さんが「かなり能動的に書かれていゝんです」という意見を重視したい。これまで一般的には奥さんや御嬢さんについて、その役割を軽視する傾向があつたのではないかと思われるが、平岡氏は御嬢さんの役割を重くみているようである。^(註1)ここでは、内容的には平岡氏の考えとは違ふかもしれないが、御嬢さんの姿をとらえていきたい。

御嬢さんは、若い女性にしては思慮に富んだ方だと「私」は言っている（下三十四）。このとき彼女は十八歳くらいで、学校に通っている。それから、琴や華道も、上手ではないらしいが稽古している。色が白くて美人である。奥さんは「御嬢さんの容色に大分重きを置いてゐる」（下十八）ようである。「私」が惹かれたのも、若い男性として無理もないことであつたらう。

ところで、御嬢さんの方も、「私」に気があつたと思われる。いくら母親の勧めがあつたとしても、関心のない男に着物をこしらえる金を出してもらつたり、また一緒にその買物に出かけたりするのはおかししい。男から着物を買ってもらうのが単なる好意ではすまされないとわかつていたはずだ。それに、母親が一緒であるとはいへ、若い男女が買物に出歩くのには、他人の好奇の目を覚悟しなければならぬ。現に「私」の方は、友人からいつ結婚したのか、君の妻君は美人だとひやかされている。そんな時代だったのである。

御嬢さんが「私」に意があつたらしいことには、まだ傍証がある。友人からひやかされた「私」が、下宿に帰つてその話をしたとき、はじめのうち「あんまりだわとか何とか云つて笑つた」御嬢さんも、冗談ではすまされなくなつたとみえる。

△御嬢さんは、何時の間にか向ふの隅に行つて、背中を此方へ向けてゐました。私は立たうとして振り返つた時、其後姿を見たのです。後姿だけで人間の心が読める筈はありません。御嬢さんが此問題について何う考へてゐるか、私には見当が付きませんでした。御嬢さんは戸棚を前にして坐つてゐました。其戸棚の一寸ばかり開いてゐる隙間から、御嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めてゐるらしかつたのです。私の眼はその隙間の端に、一昨日買った反物を見付け出しました。私の着物も御嬢さんのと同じ戸棚の隅に重ねてあつたのです。▽（下 十八）

「私」に気がないような娘がこんな態度に出るはずがない。現代とは違つて、男ですら相手の女性に好きだと直接言いくかつた時代である。御嬢さんが、直接行動に出ることはおむすずかしかつただろう。彼女としては、男の気をひいてみるよりほかに仕方がなかつたのである。

△時たま御嬢さん一人で、用があつて私の室へ這入つた序に、其所に坐つて話

し込むやうな場合も其内に出て来ました。さういふ時には、私の心が妙に不安に冒されて来るのです。さうして若い女とたゞ差向ひで坐つてゐるのが不安なのだとかかりは思へませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るやうな不自然な態度が私を苦しめるのです。然し相手の方は却つて平氣でした。これが琴を浚ふのに声さへ疎に出せなかつたあの女かしらと疑はれる位、恥づかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「はい」と返事をする丈で、容易に腰を上げないことさへありました。それでゐる御嬢さんは決して子供ではなかつたのです。私の眼には能くそれが解つてゐました。能く解るやうに振舞つて見せる痕迹さへ明らかでした。▽（下 十三）

この場面では、御嬢さんがいかに「私」を意識していたかがわかる。この「恥づかしがらない」御嬢さんを、図々しい女だと考へてはなるまい。彼女にとつては、自分が子供ではないと、「私」にわかるようにふるまつて見せるのが、自分のできる限度だったのである。それで次に、そんな御嬢さんがどうしてKに近づいたのかについて考えよう。

「私」がKの室にいる御嬢さんを初めて見た場面は次のように描かれている。△私がいつもの通りKの室を抜けようとして襖を開けると、其所に二人はちやんと坐つてゐました。Kは例の通り今帰つたかと云ひました。御嬢さんも「御帰り」と坐つた俛で挨拶しました。私には氣の所為か其簡単な挨拶が少し硬いやうに聞こえました。何処かで自然を踏み外してゐるやうな調子として、私の鼓膜に響いたのです。▽（下 二十一）

御嬢さんがKの室にいたのは、彼女に深い意図があつたことではあるまい。御嬢さんは、そのとき夕食のとき、「私」の態度を笑うのだが、それは「私」が些細なことに異常なほどの反応を示したからではないだろうか。そして、この場面で、御嬢さんの挨拶が不自然な感じのものであつたのは、いくらKを何とも思つていなくても、一緒のところを見られたばつての悪さがあつたからだと考えられる。しかもそれは、「私」に見られたから硬くなつたといえる。何でも無い他人に見られても何のことはないはずだ。つまりこれは、御嬢さんが「私」を意識

していたことを逆に示しているようなものである。

ところが、Kと「私」とが夏休みの旅から帰って来たあとで、御嬢さんはKの室に行かなくなり、「私」の世話を優先してやるようになる。これは二でも触れたが、奥さんとの間に話があつて、奥さんは御嬢さんに、もし「私」のことが好きなのなら、「私」を大切にもてなして、早く「私」の気持ちをよきさせるようにする方がよい、といった意味のことを言つたと考えられるのである。

しかし、一か月ほど経つと、御嬢さんはまたKの室に入入りするようになり、その態度もだんだんと平気にふるまつていくようになる。百人一首のカルタとりでも、露骨にKに味方して「私」にあたるのである。ここまできると、御嬢さんの態度はかなり意識的であつて、休み前にKの室にいたときは意味合いが違ふと思われる。

△私はKに一体百人一首の歌を知つてゐるのかと尋ねました。Kは能く知らないと答へました。私の言葉を聞いた御嬢さんは、大方Kを軽蔑するでも取つたのでせう。それから眼に立つやうにKの加勢をし出しました。仕舞には二人が殆んど組になつて私に当るといふ有様になつて来ました。▽(下 三十五)

ここで注意しなければならないのは、御嬢さんが、「私」を意識していて、そのためKの加勢をするはめになつた点である。御嬢さんとしては、待てども待てども心を開いて自分の気持ちを示そうとしない「私」にじれったさを覚え、いわばKをだしにして「私」へのあてこすりをやつてゐるともいえるのである。

もし、御嬢さんが少しでも「私」からKの方へと心を傾けていたとしたら、当然Kの自分に対する気持ちに気づいたはずであるし、Kの死に自分たちの婚約のことを多少なりとも結びつけて考えたはずである。しかし、実際には彼女はKを問題にしていなかったのである。Kの墓に「二人揃つて御参りをしたら、Kが無喜ぶだらう」(下五十一)という御嬢さんは無邪気である。また彼女はKの墓を「立派だ」というのだが、Kに彼女が惹かれていたら、そんなことは言えないだろう。さらに、Kの死についても、「何故其方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解つてゐないでせう」(上二十)といったとらえ方しかしていない。要するに、御嬢さんはK自身には関心がなかつたといえるのである。

御嬢さんの関心事は「私」の気をひくことであつて、Kと「私」を両天秤にかけたのではなかつた。そして結局御嬢さんは「私」と結婚することができたのだ

が、彼女は、「私」が御嬢さんの気持ちをほかりかねて苦しんでいたことや、Kと「私」との関係には思いが至らないままであつた。御嬢さんは、「私」と心で結びあわないまま結婚したので、彼女の不幸の要因はここに既にあつたとも考えられる。

四 奥さんや御嬢さんのことがわからなかつた「私」

ここまで、「私」の眼を通してそこからある程度はつきりとうかがわれる奥さんと御嬢さんのイメージについて見てきた。

ところで、奥さんや御嬢さんが「私」の心をよくとらえられなかつたと同じように、「私」の方も二人のことがわかつていなかつたと思われる。

まず、「私」は奥さんに対し、叔父のような人ではないかという疑いを抱いてゐる。信頼していた叔父に裏切られたのであるから、かなりのショックが残つてゐたとしても無理はない。しかし、奥さんが策略から娘を自分に近づけるのではないかという疑いを、疑いのまま自分の内に閉じ込め、現実の中では確かめようとしなかつたところに、「私」の人間性が現れている。

また、「私」は御嬢さんの気持ちをしっかりと把握してゐない。はじめは御嬢さんも奥さんと同じように策略家ではないかと思うのだが、御嬢さんがKに近づく、今度は嫉妬に苦しむのである。

△Kの来ないうちは、他の手に乗るのが厭だといふ我慢が私を抑へ付けて、一歩も動けないやうにしてゐました。Kの来た後は、もしかすると御嬢さんがKの方に意があるのではなからうかといふ疑念が絶えず私を制するやうになつたのです。▽(下 三十四)

こういつた具合で「私」は結婚の申し込みができないのである。ここで「私」の勇気のなさを指摘すべきではない。むしろ、日々接してゐる御嬢さんの気持ちを見抜く力・姿勢が欠けていることの方に問題がある。どうして御嬢さんがカルタとりでKに味方し「私」にあたつて来たのか、また、御嬢さんが偶然外で出会つたKと一緒に帰宅したあと、なぜ「何処へ行つたか中へ、見る」と言つて「私」をからかうようなことをしたのか、更にさかのばれば、どうして旅から帰つたとき御嬢さんは「私」に特に親切にしたのか、そういつたことを考えていけば、御嬢さんをもつと深く理解する糸口となつたはずである。

「私」は、自分の疑惑や傷ついた気持ちや傷ついた気持ちを大事にする人であったが、それを引き起こす実際の問題については真正面から取り組めない人のようだった。こうした消極性が、叔父の裏切りで助長されたものだとしても、一般的な他人に対する不信はともかく、身近な個々の人間にまで臆病となるのは、現実的とはいえない。このような「私」の心は、具体的な事柄で傷つくことはあっても、具体的に問題に立ち向かうということはない。「私」は常に自分の心の中で疑いを抱き続けたり、悩んだりしているだけである。

例えば、先程述べた、御嬢さんがKの方に意があるのではないかと疑い・煩悶。御嬢さんが「私」をからかうようなときに、「御嬢さんの態度になると、知つてわざと遣るのか、知らないで無邪気に遣るのか、其所の区別が一寸判然しない点がありました」（下三十四）という曖昧さ。それから御嬢さんの笑いを「私の嫌な例の笑ひ方」（下三十四）というように感覚的にしか受けとめられない点。そういうふうには、自分の内面に問題がとどまってしまう。これでは他人のことがわかるということは無理だろう。

奥さんや御嬢さんの姿をとらえながら「私」をみると、「私」がいかに二人をとらえていないかがわかる。そして、その人間理解の甘さは、Kに対してはもっとひどいものである。「私」はKについて、「不思議」「解しがたい」「魔物」「変な」「変に」「妙な」といったことばを用いて、「私」がいかにKをとらえにくかったかがわかるのである。

Kのことはさておいて、奥さんと御嬢さんが、Kと「私」との関係を引き立てる単なる道具として登場しているのではなく、人間理解の甘さや、彼女ら自身の功利性をも示す働きをしていることに充分注意しなければならぬ。

五 おわりに

はじめの目的、すなわち奥さんと御嬢さんのイメージについては、二と三のところ述べ、四では、彼女たちとの関連から、「私」の問題点を考えてきた。

『こゝろ』を読むとき、我々は、ややもすると、「私」（先生）とKとの関係に焦点を絞って考えがちになる。確かに、漱石は、先生とKを重要視している。「私は仕舞にKが私のやうにたつた一人であつた。先生とKを重要視している。に所決したのではなからうかと疑がひ出しました。さうして又慥とした結果、私もKの歩いた路を、Kと同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々風のやうに私の胸を横通り始めたからです」（下五十三）と先生が言っているように、

漱石の提示した、運命的とも思われる孤独の問題は、先生とKとの関わりにおいて、よく表されているといえよう。

しかし、これまで見てきたように、漱石は一方で、奥さんと御嬢さんが、先生やKを理解しえなかったことを、意識的に書いている。その意味で、この作品の中で、奥さんと御嬢さんは、孤立した人物として描かれているといえるのである。先生とKも、それぞれ孤立していたが、孤立していたのは彼らだけではない。奥さんと御嬢さんもまた、孤立していたのである。

先生が、自分の娘と結婚してから、酒に溺れようとしているのを見た奥さんは、「時々気拙い事を妻に云ふ」（下五十三）ようであったが、奥さんには先生の気持ちなどわかりようがなかったのである。また、御嬢さんは、結婚後、人の変わってしまった夫に、その原因を「何うぞ打ち明けて下さい頼んで」（上十八）も、夫から打ちあけられずに、苦しんでいる。このようなところを見ても、この二人の女性の孤立を、漱石が作品全体の中に位置づけようとした意図がうかがわれるのではあるまいか。

そのことは、漱石が、少なくともこの作品に関して、こうした登場人物を、孤独なものとしてとらえ、描いていったことを示していると考えられる。『こゝろ』でとらえられている孤独の問題は、単に、先生の孤立、Kの孤立といった観点でとらえるだけでは、不十分であつて、登場人物の、相互理解の欠如・相互の意志疎通の欠落という点からも考えるべきであらう。

そして、その相互理解の欠如・相互の意志疎通の欠落を、奥さんも御嬢さんも先生も、皆、打破することができなかった。その要因については、すでに、三、四でも触れたが、奥さん・御嬢さんの功利性、他者への不信から生じた先生の消極的な人間性などが考えられる。そうした要因は、漱石の、順を追つた緻密な書き方からして、かなり必然性があるように思われる。彼らに、ただ積極性がなかったという批判を試みても、それではすまないものである。ここに、『こゝろ』の孤独の深刻さがあるのではなからうか。

以上のようなことから考えると、奥さんと御嬢さんが、この作品で果たしている役割は相当重要なものであるといえる。漱石は、先生やKに、多少自分を重ね合わせて書いているだろうが、そこに溺れてはいない。むしろ、先生に、「私」として語らせながら、なおかつ奥さん・御嬢さんの役割をも、意識して描いていた点を、私は重要視したい。『こゝろ』は、先生の心の問題だけを追求しようとしたものではなく、奥さん・御嬢さんといった人物をも含めて、登場人物の心

の問題をとらえようとしたものではあるまいか。

(一九七八・一一)

注(1)荒正人『「心」と「道草」』(現代のエスプリ『夏目漱石』至文堂S42 P

116)

(2)遠藤祐・注釈『夏目漱石集Ⅳ』(日本近代文学大系27角川書店S49 P255)

(3)同 右

(4)『夏目漱石』(シンポジウム日本文学14学生社S50 P160)

(5)小坂晋氏もまた独自の立場から御嬢さんをとらえている。『漱石の愛と文学』

(講談社S49 P221)

(6)前掲(2) P199頭注。